

ボランティアの心

民謡40年 人様の喜びは我が喜び

私にとって「ボランティア」とは、誰かの為ではなく自分自身を心身共に修練することだと思っています。

私と民謡や三味線との出会いは、かれこれ40年位になります。その頃はただ上手になりたいの一心でした。老人施設で勤務する機会があり、利用者とふれあう中で音楽、特に童謡や懐メロ、民謡にすこく反応する人達がいるのに気付き、昼休み時間等を利用して三味線で伴奏し、一緒に唄っていました。

その時の利用者の嬉しそうな笑顔、自分がやってることが、だれかに喜ばれ、役に立っているのだと思えて私の方が嬉しくなりました。OBになってからも地域や老人施設から声が掛かると進んで訪問して来ました。カレッジに入ってからも以前からの地域イベントや施設を大切に、訪問しております。

同じところに行くのに同じ曲目ばかりと言うわ



熊本益城町の赤井仮設団地で

けにはいきませんし、マンネリ化は禁物です。となると新しい曲目、違うジャンルのものも覚えなくてはなりませんし、それなりの練習も疎かにはできません。遣っていくうちにこれまで出来なかった事もやれるようになったり、人前で話すことが苦手だったのが、楽しくさえ思えるようになりまし

た。それがカレッジに入り、更にいろんな出会いを体験しました。民謡同好会に入り、そしてそのOBの民謡クラブでの活動、民謡同好会後輩の指導、育成もそれです。また、それらがきっかけでグループわの東北支援・交流活動チームに4回も加えて頂き、この度は熊本へも参加出来貴重な体験をさせていただきました。

結局ボランティアとは相手の立場に立ち、本当に欲しているのか、心底から良かったと感じてくれているかを自問自答し、それに向けて自分を磨くことだと思います。結果「本当に楽しかったよ。嬉しい」と言ってくれるのを聴き、その態度を見て人に役に立つ自分に幸せを感じる事だと思います。

(波多野 武郎 食16 KSC民謡クラブ)

障がいの子には褒めて寄り添おう 学習支援者 秋の集い開く

障がいの子には褒めて、寄り添い、根気強く接することが大切です。学習支援者の秋の集いが11月9日、カレッジ学習室で開かれ、約30人が出席しました。

堺学習支援委員長、小畑グループわ 理事長のあいさつの後、神戸市教委特別支援教育課の指導主事・後藤田和成氏(写真)の「これからの特別支援教育について」と題する講演がありました。

後藤田講師は人は聞こえ方、関心、経験、心の状態、家庭の背景がそれぞれ違う。発達障がいの子は①落ち着きがなく、授業に集中できない②すぐかっとなって、トラブルを起こす③コミュニケーションが取れないなどの傾向があります。発達障がいの子は1クラスに5、6人おり、自閉症、アスペルガー症候群、知的障がい、学習障がいなど様々です。よく見えない、聞こえない、じっと出来ないなどの特徴があります。



障害の子は「困った子」ではなく「困っている子」です。「こうしたら」「よくできたね」と子どもを尊重し、褒めること、子どもに笑顔で接することが大切です。

◆学習支援についてのQ & A◆

Q：今年の夏から特別支援を始め、図工と音楽を担当していますが、子どもの思わぬ反応に、仰天することがあります。どう接したらいいのか戸惑っています。

A：特別支援を6年続けています。最初は画材を配るまで座っておれない、周りの子に迷惑をかける子がいるのに困りました。でも、根気よく続けていると子どもに情がわき、自然に接することが出来るようになります。

A：「こうしたらどう？」と子どもに出来るだけやらせるようにしていますが、つい手を出してしまい、小3の女の子に猛反発されたことがあり、困りました。

後藤田講師：適度に距離を置くこと。子どもに寄り添うだけで情緒が安定します。声をかけて子どもに反応があれば少しだけ進めてはいかげでしょうか。

(文・写真 広報 永野知己)